

さわやかトカラ情報

南北160km

「心をつなぎ 気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒892-0822鹿児島市泉町13番13号
TEL 099-227-9771

【新たな門出の時、別れを惜しみながら新しい出会いを！！】

十島村教育委員会教育長 木戸 浩

16人の中学校3年生が「島立ち」をします。また、留学生の中にも島を離れる子がいます。そして異動する教職員やその家族も島を後にします。出会いがあればいつしか別れも訪れます。一緒にいた期間はそれぞれかもしれませんが、十島村での思い出は一生忘れられない貴重なものとなっていると思います。これからも絆を深めていっていただければ、また十島村を訪れたいという想いに繋がっていくと信じています。



1 「小さな改善」の積み重ねが、「改革」へ！

日々の職務を遂行する中で、それまでの反省はもちろん、その都度気づいたことに迅速かつ前向き対応することが非常に重要です。内容によっては、即、改善できるものもあります。常に創造・前進し続ける組織（集団）であるためには、必要不可欠の視座であると思います。たとえ、行事名は同じであっても、その目標・内容に新しい視点を取り入れたり、取組の方法に工夫や改善を加えたりして創造的・開発的に企画し実践していくことで充実が図れます。それに伴い、成果が見え、多くの村民の皆様（児童生徒、保護者を含めて）から一層の信頼を得ていくのだと思います。

今、「改革を進め、躍動感があり、魅力のある学校づくりをする」ということが、これまで以上に強く求められています。学校への期待は増すばかりであり、その負託に応えるために、教育委員会も学校と一緒に変わることが求められているわけです。

変わるためには、言うまでもなく教師自身の意識や行動がよりよい方向に変わらなければなりません。「小さな改善」の積み重ねによって、気がついてみれば、いつの間にか組織が、あるいは学校が、変わっていたという姿をこれからも目指し続けたいものです。

定例の業務であっても、教職員のちょっとした思いつきや小さなアイデアとスピード感のある改善行動に期待しています。「何のために、何を、どのように変えてみるのか。」—「それによって何がどう変わったか」。創意あふれる企画と実践は、謙虚でより確かで客観的な評価によって、さらに前進・進化のための道標を見出せるのだと思います。義務教育学校に向けての改革を期待しています。

2 「九仞(きゅうじん)の功(こう)を一簣(いっき)に虧(か)く」

「蟻(あり)の穴(あな)から堤(つつみ)も崩(くず)れる」ことのないように。

「九仞の功を一簣に虧く」とは、あと一步の所まで行きながら、気を緩めたために物事が完成しないことのたとえです。「蟻の穴から堤も崩れる」とは、堅固に築いた堤も蟻の作った小さな穴から崩れることがあるというたとえです。

いよいよ、本年度の最終コーナーを回ったところです。小さな油断や誤りがもとで、大失態や大失敗を引き起こすことがないように、お互いに引き締め声をかけ合っていきます。

この1年間こつこつと地道に積み上げてきた努力が、最後のちょっとした気の緩みで台無しになることがないように、しめくりと指導の継続（遣り残している業務はないか確認、春休みの家庭学習や生活の仕方などについても状況に応じた確実な指導を）をお願いします。

村民の皆様も、あと少しの辛抱だと思えます。トンネルの先の光明が少しずつ大きくなってきているようです。

お互いに声をかけ元気を出し合い、笑顔で過ごせるように頑張ってください。

令和5年12月25日 南日本新聞「若い目」掲載

中之島小中学校の児童、生徒はいろいろな場で太鼓の演奏を披露するのが伝統だ。港で新任の先生を迎えたり、敬老会にも出かけたり、トカラマラソンの出走者を見送ったり。敬老会にも出かけるが、私は太鼓が嫌いだった。手が痛くなるし、楽譜を覚えるのも大変だからだ。めり校内オーケストラの練習を見て来た地域の演奏者を決ると言うようになった。私も早く受けて、違うのをたたきたい。上達したいという気持ちが練習を続けることに決めた。自分だけが嫌いだった。代わって私はなぜか、太鼓が嫌いだった。自分でも分らないくらい楽しく演奏した。汗だくになる。みんなの音がそろった時は、とてもうれしい。強弱をつけて表現するのも面白い。太鼓の手は今や豆だらけ。それでもいい。これからも中之島の太鼓をたたくことを続けたい。

響く太鼓の伝統を引き継いでいく
中之島中一年 久木山 陽

【この島で初めて捕らえた生きもの】
口之島中学校 1年 松田 真治

この島に来て5か月後のことだった。草むらになにかのうごめきがあった。それをよく見ると、うろこがあり模様があった。「蛇だ。」と僕は興奮した。鹿児島市に住んでいたころは、ペットショップでしか見たことなかった。蛇が大好きな僕はそれを捕まえたいと強く思った。

家に帰ったときに、その蛇の特徴を思い出して調べてみたら「シマヘビ」ということがわかった。しかも、シマヘビには毒がないこともわかった。その後も何度か蛇を見かけることがあったが、捕まえることができなかった。

そしてこの島に来て2年目のころ、寮の前にシマヘビがいた。僕はシマヘビのいる所に走り、足を踏んで動きを止めた。僕はそれのとき、「今度こそ捕まえられる。」と思った。そして近くにいた同じ寮の友人に軍手を持ってきてもらった。軍手をつけて蛇の首をつかんだ。僕は達成感と高揚感に包まれた。早速、素手で蛇に触ってみると意外と柔らかくてつるつるしていた。僕はもう少しふくれて硬くなったホースのようだろうと思っていたのでびっくりした。

今はあまり見かけることはないが、また暖かい季になったら捕まえて触ってみたいと思っている。

【中之島小・中学校からのメッセージ】
教諭 園田 駿

中之島に来てから約3年が過ぎようとしています。赴任する前は期待と不安で胸がいっぱいでしたが、島に到着してすぐに聴いた子どもたちの御岳太鼓の演奏で勇気を得たことを今でも覚えています。中之島は台風や波、今年度は12月に起きたフェリー火災の影響で船が鹿児島島を出航せず、食料等が届かないことや欲しい物をすぐ購入できないなど不便なところもありますが、それ以上に島ならではの良さもたくさんあります。島の中にある温泉に入って日ごろの疲れを癒したり、島バナナやスイートスプリングなどの特産品を頂いて食べたり、休日は釣りをしたりするなど、島に赴任したからこそ特別な経験をしています。

昨年に新型コロナウイルスが5類感染症に引き下げられたこともあり、コロナ禍以前の行事にも参加することができました。3年間過ごしてきた中で何よりも心に残っている行事が中之島大運動会です。運動会の始まる3か月前から地域の方と放課後集まり、何度も話し合いを重ね、準備を行いました。運動会当日の係や地域種目にも積極的に参加していただき、島一丸となって行う一大イベントだと感じました。子どもたちも日頃の成果を十二分に力を発揮できる運動会になりました。

十島村には「15の島立ち」があります。島立ちに向けて、ここからできる教育を行い、子どもたち共に成長できるように今後も邁進していきます。

『教職員仲間であるあなた』への 私からのメッセージ

口之島から宝島まで南北160km。日本一長い村で勤務されている先生方とお会いできる機会は少ないですが、夏の研修会やTV会議等で交流できることを楽しみにしています。十島の子どもたちのために共に頑張りましょう。

子供のうた

（二月三日 南日本新聞掲載）

みちぶしんたのしかったよ

みちぶしんが
すごくたのしかったよ
一、二ねんとまゆみせんせいが
そろってうれしかったよ
またやりたいたいよ
さいしよは
手がばんだたつたよ
こんどあたら
手がすつくばら
がんばらうぞ
がんばつちやうぞ

諏訪之瀬島小一年

はせがわ ひかり

子供のうた

（二月十五日南日本新聞掲載）

三日月

するする
すいすい
すやすや
うさぎが
わたしは
何をしてみようかな

諏訪之瀬島小四年

杉田 董

